令　和　5　年　度

小　論　文

10：00 ～ 11：30

文　学　部

国　文　学　科

学校推薦型選抜（一般）

注　意　事　項

1. 開始の合図があるまでこの冊子を開いてはいけません。
2. 合図があってから受験番号を小論文解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
3. この冊子は6ページあります。
4. 印刷の不鮮明な箇所や、汚れの箇所があった場合は、すみやかに申し出なさい。
5. 小論文解答用紙は2枚入っていますが、提出するのは1枚だけです。残りの1枚は下書き用です。
6. 小論文は**縦書き**で書きなさい。
7. 冊子と下書きに用いた解答用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

国立国会図書館は、明治百年記念事業の一つとして、昭和四十一年（一九六六）から十年がかりで『国立国会図書館所蔵　明治期刊行図書目録』本編五巻と書名索引編とを編纂刊行した。私はその最終刊、索引編の編纂に約二年間参加し、本当にやりがいのある仕事をさせていただいた。

書名索引編纂の仕事の最大の問題は、全部の書名にフリガナをふらねばならぬという事である。私の勤務した二年間、スタッフのエネルギーの大半はそれについやされたといってよい。勿論本編編纂の時一往のフリガナはつけたわけだが、本編はかなり細かい分類のもとに主題別編纂がされているから、頭から五字程度のよみがわかれば大部分は分類別にさして問題なく排列できた。しかし書名索引には主題別分類がなく、総計約十二万タイトルにも及ぶ書名を、哲学書だろうと化学書だろうと、英語のリーダーだろうと政治建白書だろうと、お上品な慶祝歌集からチョウヘイ（ア）のがれの心得、一般産業のハウツーものから「吉原細見」に至るまで、全部一本の五十音排列で並べなければならない。となると頭から十字以上も読んで来てやっとよみが分かれて排列の前後がきまる、という例もめずらしくなく、結局全書名を読まざるを得ない。更には群書類従をはじめとする叢書・全集類や小説集の内容などはすべてメンミツ（イ）に副出（注1）したので、本編編纂の時には読まなくてよかったそれらの書名・題名まで読むことになってしまった。私は主に仏書・文学書のよみを担当したので、とりわけ四苦八苦もし、又楽しい勉強もさせていただいたわけである。

近世までの歴史・文学書では何といっても『国書総目録』（注2）の恩恵がズイイチ（ウ）であった。しかし悲しいことに、この目録は頭の一字のよみの見当がつかないとお手あげである。原因は全く当方の学力不足にあるのでおはずかしい限りであるが、いろいろな回り道も失敗もあり、今頃になって誤りに気がついて赤面している事も一二にとどまらない。

『国書総目録』でも手におえないのは芝居の外題（注3）であった。大変だろうと予想はしていたものの、幼い時からの芝居狂とて何とかなるかと思ったのが大間違い。院本物や黙阿弥物は何といっても調べればどこからかよみは出て来るが、勝諺蔵著『演劇脚本』

という十一冊シリーズ、佐橋五湖・中西貞行・金沢竜玉などという人達のものには泣かされた。現物を見てもルビはなし、ライブラリアンとして典拠のあるよみをせねばいけないと言われては当て推量でごまかすわけにも行かない。『歌舞伎年代記』はじめいろいろなトゥールに当たるが、出て来ないものは出て来ない。掛け流しの新作物で関西の小芝居で一度上演されただけ、というようなのはどうしようもないと思われたが、関西松竹の上演記録の詳しいものがあったのと、書庫のすみから『演劇脚本外題目録』というすっぺらなパンフレットを見つけ出したので、ようやくほとんど全部に「典拠のあるよみ」ができたと思う。たかが芝居の外題位……と思し召す劇通の方々、ためしに次の例をお読みになって下さい。

(1)琴乱調朝日松風　(5)君臣波瀾宇和島
(2)猿猴於申技芸巧　(6)門松宝雙六
(3)京紅藍杜若　(7)恋夫帯娘評判記
(4)橘牡丹皐月夜話

正解は左の通りです。

(1)イトノミダレアサヒノマツカゼ。これなど全くなまやさしい部類です。

(2)エンコウオシンギゲイノカラクリ。軽業師あがりで身軽な「おしん」という女賊(?)がいたらしい。「猿猴」は手長猿。『八笑人』にも「もっと手をのばせ」と言われて「猿猴じやアあるめへし」と言う所があります。

(3)キョウゴウカソメテムラサキ。「紅藍」は紅花と藍花(縹色)の合せ染め、すなわち「合花」で、杜若の紫色になる。

(4)ハナキョウダイサツキノヨバナシ。兄弟で五月というからには曽我の仇討。橘と牡丹は十郎と五郎を演ずる役者の紋(十三代目羽左衛門すなわち若き日の五代目菊五郎と九代目團十郎でしょう)。

(5)フネトミズナミノウワジマ。山家清兵衛の宇和島藩お家騒動。「君者舟也、庶人者水也、水則載レ舟、水則覆レ舟」(荀子)。京極為兼は「物としてはかり難しなよわき水に重き舟しも浮かぶと思へば」(風雅、一七二七)と詠んだけれど、狂言作者の教養も大したもの。

(6)マツカザリオタカラスゴロク。何のむずかしい謂(いわ)れ因縁もないけれど、カード点検の度ごとに「マ」の所に「カドマツ」が並んでいるので「キャッ、ミス配列！」ととび上り、ルビを見てホッとすること数知れず、という札つき。

(7)メオトムスビムスメヒョウバンキ。これは最後まで??で、見つけた時は本当に重荷をおろした気持ちでした。

案外大変で困りはてたのは、近代小説の題名だった。明治期の小説集は、たとえば「坊つちやん」「二百十日」「草枕」をまとめて『鶉籠(うずらかご)』の書名で出版したり、何人もの作品を集めて『春夏秋冬』と名づけたりするものが多い。勿論全集・選集も多い。そこで一篇ずつの題名を副出して、よみをつける事になったのだが、どういうわけかあの頃の小説集は、本文はベタルビなのにかんじんの表題だけルビなし、というのがまことに多い。本文中に出て来るだろうと、もしやにひかされて鍵つきの特別書庫の中でとうとう一篇立読みしてしまう、時には中にいるのを知らずに閉めこまれ、大声あげて開けてもらう、というケースが何回もあった。たとえば一葉の短篇「五月雨」はサミダレかサツキアメか。近年刊の全集や研究書など見合わせても結局わからず、本文中にたった一箇所「五月雨傘(さみだれがさ)」とあったのでサミダレにしてしまったが、今も気になっている。また鏡花の「露肆」はホシミセではないかなあ、という気が強くしたものの、どうしても主任の小野さんを納得させるだけの根拠が見つからず、ロシですませたが、刊行後に出た『鏡花全集』最終巻の解説にホシミセとあって、ああやっぱり……と残念であった。このケースは硯友社などの美文家だけでなく自然主義の作家にも多く、「枯林」(吉江孤雁)はカレバヤシかコリンか、「夫恋し」(徳田秋声)はツマコイシかオットコイシか(ツマだろうとは思うが秋声だけにオットの方がリアリティーがありそうな気もする)、「青梅」(小栗風葉)はアオウメか地名のオウメか、「行水」(川上眉山)はユクミズかギョウズイか、内容を見なければわからず、見てもわからぬものもあり、閉口した。

近代小説に限らず、「青梅」「行水」といった手のものは、見たところ字面(じづら)が格別むずかしくないだけに[1]かえって問題を起こしやすい。何の気もなくカードにつけてしまったルビが思考をコウソク[エ]して、何人もの点検の眼を疑われもせずに通りぬけ、ある日ある時ハッと間違いに気づいてあわてる事も一再ならず、ことにスタッフの半数以上は戦後生まれの若いお嬢さんなのだから、間違うのも尤(もっと)もと気の毒で笑うに笑えず、おなかをおさえて一人で苦しんだものであった。「イブツノヒトクチ」とは何事かと思

えば「遺物の一口」であったり、「猟船サンジュウマル」とはふしぎな船もあるものよと思ったら三重県の水産会社が持っている「三重丸」であったり、「オシン」というのはどこの芸者さんの話かとよくよく見直せばあの『太平記』の「阿新」であったり、鏡花の「春晝」が「シュンガ」になったり……。

明治と現代の常識のずれにも我ながら驚かされる事がしばしばで、「軍の噺」という児童書があり、はてな、軍部の事を一般に「軍」と言い出したのは私も覚えてからの事だったが……と現物を見たら、ちゃんと「軍の噺」とルビがあった。「尊い日本」は「トウトイニッポン」ではなく、「タットイニホン」。「読書自在」「読書入門」の類はてっきりドクショとのみ思っていたが、現物を見たらアイウエオの手引書、すなわちヨミカキ自在、ヨミカキ入門であった。徳田秋声の短篇「人の哀」に若いお嬢さんの手でヒトノカナシミとよみがつけてあるのを、念のため調べ直すと、例によってルビなしだが、学生と山の乙女の行きずりのほのかな恋心が、一夜の大なだれであとかたなく押し流されるという話。どう考えても人のカナシミではなく人のアワレに違いない。でも近頃の若い人には人間の存在が哀れなものだなどという感情はないのだろう。帰宅して同年輩の長男に読ませたら、やはりヒトノカナシミとしか読まなかった。軍がイクサであり、読書がヨミカキであった時代はもう遠い過去の事と私にも思えるけれど、人の哀しみはあっても人の哀れの感じられない時代が現実に来ているのだと思うと、いささか心細くもある。

むずかしい書名が読めた時の嬉しさもさる事ながら、フリガナ商売の醍醐味は何といっても、漢籍めかしたかたい字面としゃれのめしたよみとの不即不離、阿吽の呼吸の見事さに、一人「ウン」とうなずき、ニヤリと笑うひと時にある。『愛京誉誌』『厚釜集』『於多能集』『女好路誌』『可愛良集』『興伝美南誌』(注4)『娯奇言誉誌』『娯覧喃誌』『随分五弁利』『一寸一福粋喃誌』『手当芳題護宝奴記』……。いずれも明治二十年代前半までの、読物雑纂・滑稽本・狂歌雑誹・音曲集・芸妓評判記の類、巷間読みすての小冊子につけられた書名である。何と楽しい書名だろう。何と嬉しい人達だろう。さきにあげた芝居の外題ともども、明治に引きつがれた江戸文化の懐の深さに、つくづく舌を巻いた。

二年間フリガナと格闘しながらいろいろな事を考えた。今まで、フリガナとは読めない字を読めるようにするものとばかり思っていたが、それだけではないようである。かたい内容をやわらげて伝える啓蒙的役割。やわらかい内容をかたい字面でカム

フラージュするおかしみ。漢字とかなの二様のよみが風雅の二重奏をかなでる事もあれば、なぞときやパロディの興趣をかき立てる事もある。こんな面白い言語の文化現象は、日本以外にも果たしてあるか否か。このフリガナの文化[3]を、もっと系統的に研究し、体系づける事はできないものだろうか。戦中から戦後にかけ、フリガナは「子供の目に悪い」という理由で活字の世界から追放されてしまった。でもそれで眼鏡をかける子供達が減ったとは誰にも言えない一方、漢字を読みこなす能力が目に見えて衰えた事は明らかだ。少年雑誌や通俗読物のベタルビで育ち、苦労なしに沢山の漢字と顔なじみになれた御恩返しには、いつの日にかこの楽しいフリガナの文化をもう少し深く追求してみたい、などと考えている私の背中には、きっと大きく「オッチョコチョイ」とフリガナがついているに違いない。

（岩佐美代子「フリガナの文化」、同著『京極派と女房』所収による）

（注）

1　副出（ふくしゅつ）……目録作成において、基本記入標目として採用されなかった標目を補助的に記載すること。ここでは、叢書・全集などに収載されている各書目の書名・題名を逐一掲出すること。

2　『国書総目録』……日本人が江戸時代末までに著述、編纂した書籍を書名のアイウエオ順に配列した目録で、それぞれの書籍について巻冊数・分類・編著者・成立・写本または版本の所在などの情報を記す。昭和四七（一九七二）年に刊行を終えている。

3　外題（げだい）……演劇などの題名。

4　興伝美南誌（こうてみなんし）……「……なんし」は「……なさいよ」の意の遊里語（さとことば）。（原文にある注記の転載。）

問一　傍線部ア～オのカタカナは相当する漢字を、漢字は読みに相当するひらがなを解答欄に記しなさい。

問二　波線部「物としてはかり難しなよわき水に重き舟しも浮かぶと思へば」から、形容詞をすべて抜き出し、それぞれの終止形を記しなさい。

問三　傍線部1「かえって問題を起こしやすい」とあるが、なぜか、理由を五〇字以内で説明しなさい。

問四　傍線部2「明治に引きつがれた江戸文化の懐の深さに、つくづく舌を巻いた」とあるが、そのように感じたのはなぜか、七〇字以内で説明しなさい。

問五　傍線部3「フリガナの文化」について、あなたが考察したことを、具体例を挙げながら、六〇〇字以内で述べなさい。